

## 研究ノート

### 姫路ゆかりの保育の先駆者

—エドワイン・ベーカーと野口幽香—

山本郁子

姫路日ノ本短期大学 〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂890番地

Research Notes

Edwin Baker and Yuka Noguchi

were pioneers in early education associated with Himeji

Ikuko Yamamoto

Himej-Hinomoto College, 890 Koro, Kodera-Cho, Himeji, 679-2151, japan

播州平野の真中を突き抜ける市川流域は、古代から人々が住み発展したところであるが、その下流域の姫路は、江戸期に幕府の西国支配の要として重要な位置にあり、大いに栄えた。明治になっても播磨地方の中心地で、三上参次、辻善之助（ベーカーの教え子）、和辻哲郎など高名な学者を輩出したが、渋い銀色のひかりを放つ二人の幼児教育の先駆者がいた。自宅を開放して託児所をはじめ、のちに幼稚園を開くだけでなく、地域の人々に博愛の精神を貫いたエドワイン・ベーカーと日本で初めての貧困家庭の子どものための保育施設「二葉幼稚園」を開いた野口幽香である。

#### 【エドワイン・ベーカー】

1853年、米国マサチューセッツ州ウエスト・デダムでデクスター・ベーカーの息子として生まれた。ちょうど日本では嘉永6年、アメリカのペリーが黒船4隻を率いて浦賀に現れ開国と通商を求めてきた年である。

父のデクスター・ベーカーは、大きな農場を経営するだけでなく、農産物の取り引

きをして裕福であり、家族は何不自由のない生活をしていた。

エドワイン・ベーカーは末っ子であったので、とりわけ祖母にかわいがられるおばあちゃん子であった。祖母からイエスやマリアの物語や自分たちの先祖が大西洋を越えアメリカに渡り、家族が力を合わせて未開の原野を開拓したことを聞いて育った。

さらに祖母は近くに教会がなく、遠くの教会へ行かねばならなかつたので、嫁入りの持参金を投げ出して教会建設の基金とし地域の人々に呼びかけ多くの協力を得て教会を建てた。教会では礼拝だけでなく、子どもたちを集めて讃美歌を歌ったり、聖書の話などを行つたり、いわゆる日曜学校を始めた。このような祖母のキリスト教の信仰や社会に貢献する生き方は、のちのベーカーの人生に大きな影響を与えた。

ベーカーは高等学校を卒業すると、父の農園で働いていたが、尊敬するプロテスタント海外伝道者のネーザン・ブラウン神学博士が日本へ布教に旅立つことを知り、自分も日本に行こうと決意した。パブテスト外国伝導協会に外国人宣教師として派遣を

申請するが、牧師の資格がなかったので、渡航は認めらなかつた。しかし、日本へのあこがれはつる一方であつたので小学校教員や英語教師の資格をとり、渡航の準備をすすめた。するとその努力を見ていた協会から「非公式であるが海外伝導の代表として認める」という通知が届いた。

1883年サンフランシスコを出発し、ハワイ、フィリピンを経由して、翌年1月に横浜に上陸した。

到着後は日本のキリスト教協会に行ったり、旅行をしたりして見聞を広げていたが、1886年(明治18)横浜の商業学校夜間部の英語の教師となり、のち中村正直博士(東京師範学校附属幼稚幼稚園校長となる)の経営する英学塾東京同人社で英語の教鞭をとつた。

ちょうどその頃、皇居の堀端で聖書を読みふける美しい娘、井上リュウと知り合い中村正直博士の仲人で結婚したが、翌年産後の肥立ちがすぐれず、娘ネリーとともに世を去つた。

ベーカーは、傷心し落ち込んでいたので中村正直博士から兵庫県の姫路で英語の推薦を依頼されているので行ってみないかと勧められ赴任することになった。

1889年(明治22)6月姫路中学校に英語の教師として着任した。37歳の時で、**姫路のベーカーさん**の誕生であった。

姫路の中学校は、市内船場の景福寺にあったが、このころには京口に新校舎を建て、県立の中学校として運営されていた。この学校は姫中と呼ばれ、地域の秀才が集まり、努力しないと進級できないという名門であった。卒業生で歴史学の権威辻善之助や東京市長になった永田秀次郎など各界で活躍する英才を多く輩出している。

勤めている間に士族の岡トリと再婚し、五軒邸に居を構えた。

その頃の日本は富国強兵、殖産興業をス

ローガンに国づくりをやっていたが相対に人々は貧しく働いて食べるのがやっとであった。姫路においても同じで働きたくとも子どもがいるために働けない人々を助け、子どもたちの養育にと自宅を開放して“託児所”を作った。妻のトリはやんちゃな子どもたちに相当手をやいたようである。

1892年(明治25)の市川が決壊し大洪水で被害にあった人々を自宅に収容し、大量のさらしを買いもどめて肌着を作り人々に配って救済した。

姫路では、いくらキリスト禁令が解除されたといつても外来の宗教には無理解で妨害する者もいたが、徐々に信者も増え、教会が必要になったので、多額の寄付をして綿町に教会の十字架をあげることができた。

このようにベーカーはしだいに地域に溶け込んで親しまれていった。

1894年(明治27)に日清戦争がおこると戦費調達のため教育予算が減らされ県知事と同じ百円という高給取りのベーカーは退職を迫られ、翌年第6回の姫路中学校の卒業が終わると退職願を提出した。

これ機に妻トリを主任保母として自宅の近くにベイカー保育所を新設した。職員を雇い、オルガンや遊具も整え、有料保育園としての出発である。ただ生活に困っている家からは月謝をとらなかつたが、わけ隔てなく子どもたちをかわいがつた。

この頃の日本は日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦と10年おきに戦争をして、軍国主義の波は姫路にも押し寄せていた。ことに一次世界大戦の経済は不安定でのちの米騒動は深刻であった。このような時に、ベーカーは豊かでもないのに蓄えを貧しい人々に分け与えた。

当時の衛生環境は今と違つて下水道ができておらず、五軒邸の町は夏になるとドブがよどみ、蚊やハエの発生源になつてゐた。赤痢やチフスなどの伝染病が流行り、毎年

病人や死者をだしていた。ベーカーは夕方になるとステッキを持って散歩しながら、町内のドブを見て回り、よどんだところがあると掃除つまりドブさらえをするのを日課としていた。そんなベーカーも年とともに衰え、昭和8年12月23日、姫路の聖者として深い眠りについた。

### 【野口幽香】

1866年（慶応2）姫路市清水で姫路藩士野口野（いやし）の6人きょうだいの2番目の子として生まれた。

父・野は、士族階級であったが、経済的には恵まれず、薬売りや心酔していた福沢諭吉の写本の内職をしていた。廉潔を重んじ、お世辞を知らぬ世渡りの下手で、武より文に優れた人と言われた。母・くりは、儒学者の娘で開放的で明るい性格であった。幽香は、このような両親のもと、のびのびと育ち、父の写本を通して時代の新知識に接する機会を得ていた。

1871年（明治4）5歳になり姫路の総社の寺子屋に通い始めたが、読み書きやそろばんだけではと、学問に理解の深い両親の配慮で田島藍水塾に通い、漢字と英語を学んだ。田島藍水はクリスチヤンであった。

1872年（明治5）「学制」が発布され、1873年（明治6）7歳の幽香も姫路の小学校に通うことになった。

1874年（明治7）父の職により生野口銀谷校に転校する。生野銀山では、技術指導に来ていた外国人に出会い、初めて外国人の子どもと遊び彼らの生活に驚きと刺激を受けた。

明治8年父が兵庫県学区取り締まりとなり、姫路に戻り、1878年（明治11）男子校である姫路中学校に入学したが、たった一人の女子学生の幽香は、周囲から疎外され1年足らずで退学する。

退学後1年半の裁縫修行に専念した。この修業は、のちの社会事業に役立つことになった。

父の転勤に伴い明石へ、さらに兵庫県学務課専務で神戸に移住した。

その間、15歳になった幽香は、花嫁修業を始めるが、「米欧回覧実記」等の本を読み刺激され海外に目を向けるようになった。

生來の向学心は抑えがたく、1885年（明治18）19歳で東京女子師範学校に入学した。（のちに東京師範学校女子部）常に成績は優秀で卒業式では総代を務めた。その間にフレーベルの幼児教育思想に目覚めていった。

両親との死別や幽香の方が年上だと理由で男性の両親に結婚を反対され、失意の幽香を救ったのが教会の受洗であった。これらのことは、幽香の人生に大きな影響をもたらすこととなり、生涯独身を貫いた。

卒業後、母校の附属幼稚園を経て新設の華族女学校（のちの女子学習院）附属幼稚園に勤務した。付き添いを従えた上流階級の子弟が大多数であった。一方、出勤する途中で貧民の子どもたちが地面に字を書いて遊んでいるのを見て、その子どもたちにも同じようにフレーベルの理想どおりの幼児教育を実践したいと、同僚の森島峰とともに2年間の奔走後、1900年（明治33）幽香35歳で麹町の借家で「二葉幼稚園」を設立した。

社会一般の程度を高め、罪悪を未然に防ぐためには根元的に「予防のI オンスは治療のI ポンドに優る」<sup>4)</sup>ものである。社会改善の上にも有効であると記した。この訴えによる募金活動は、上流社会の人々を慈善事業に結びつけた。

「二葉をして生育せしめ、愈々茂り益々榮えしめ、幾多の貧児が此の陰に世の風雨を避けて、安らかに生ひたつを得しむ…」<sup>4)</sup>園名の由来と信念が設立主意書に記されて

いる。

幽香は、華族女子校付属幼稚園に勤めながら、二葉幼稚園を経営した。家庭訪問や衛生指導、遠足など、子どもとその親たちの生活支援を全力で支援した。キリスト教の精神のもと、フレーベルの理念を基本として子どもの自主性を尊重し、自然になじむよう進めた。

1906年（明治39）さらに多くの子どもたちを救うべく、東京の三大貧窟と言われた四谷鮫河橋（現在の新宿区南元町）へ移転し200名規模の幼稚園へと拡大し、本格的な「貧民幼稚園」を始めた。

一般の幼稚園は「幼稚園保育及び施設規定」に定められている5時間以内の保育時間であった。しかし、二葉幼稚園は、午前9時から午後4時までの7時間。実際は、母親の仕事で朝7時から夜遅くまでだった。

野放しのいたずらっ子が多かったので、規則に縛り付けず、緩やかな教則で進ることで、粗野な言葉使いが改まるようになっていった。

また、月謝を無料にするのは親が依頼心を強めてよくないと判断でわずかばかりを徴収した。

園外保育を積極的に取り入れたり、園で入浴させたり、親との懇談会、家庭訪問を繰り返すことで家庭の生活も改善することにつなげた。

小学校との連絡を取り合いながら情報交換をし、卒園後の園児のことを気にかけていた。工場勤めで家庭教育を受けられない少女たちには、夜間縫製部を作った。幽香の中学校中退後の裁縫修行から結びついた。

自習時間を過ごすための図書室を設け、少年少女クラブや読書会などを推進した。今でいう学童保育である。

1916年（大正5）「二葉保育園」と改称し、57歳で学習院幼稚園を退職すると二葉保育園に専念できるようになった。

戦後は、戦災孤児収容に力を入れ、小学校へ通えない子どもたちのために「小学部」、子どもとその母親の支援を目的とした母子寮、教会の設置などさまざまな活動を展開した。

すべての子どもたちの教育と生活を守るために1950年（昭和25）84歳でこの世を去るまで幼児教育に一生をささげた。

### 【まとめ】

エド温・ベーカーが姫路中学校で英語の教師として赴任してから姫路とのかかりができた。姫路城の見える五軒邸で学校に通う傍ら地域の子どもたちが十分な教育を受けられていないのを見、その教育を何とかしなければと託児所を開き、姫路中学校を退職後に幼稚園に発展せしめた。

地域の活動として、キリスト教の伝道や災害で困った人を助け地域の環境整備として溝掃除や道路補修など社会奉仕に忙しくしていた。

自らの生活は、服装や食事においても質素で豊かでもない貯えを人々にほどこし、清貧にして聖者であった。

野口幽香は、東京女子師範学校を卒業し、附属幼稚園、華族幼稚園に勤務しながら貧しい人々の子どもたちが十分な教育が受けられていないのも見て、二葉幼稚園を開き、フレーベルの幼児教育を実践した。その思いは、「二葉」の二文字に込められている。種をまくと、大地から芽が出るが、その芽は、二枚葉で水をやり、光をあたえ風雨から守ってやらないと大きく育たない。その手助けが幼児教育である。その愛の深さは、のちに貧民が多いとされる四谷鮫河橋に幼稚園を開いたことでも伺い知れる。

さらに、戦後の孤児収容やキリスト教協会設立など多くの社会事業を行っている。

エド温・ベーカーは、姫路を舞台に、野口幽香は、姫路で幼少期を過ごし、キリ

スト教の博愛の精神をもって困った人、貧しい人々に手を差しのべるだけでなく幼児養育の先駆者であった。

あらゆる愛の上にもっと大きな全人類的な愛があることを学ばなければならない。

余談ではあるが、エド温イン・ベーカーの生涯「碧眼の良寛」の著者である石川一夫氏は、幼少の頃、五軒邸でベーカーさんを見て、この記憶を残そうと思い執筆された。ベーカーの生き方は、石川氏に引き継がれ、地域の教育として「五軒邸子供会」を作られ、清掃奉仕活動などを通じ地域の子どもたちの絆を作る実践をされた。子供会は全国に普及し、地域の教育として定着している。

#### 引用・参考文献

- 1) 石川一夫 (1971) 碧眼の良寛, 修道社
- 2) 一番ヶ瀬康子 (1962) 日本の保育, ドメス出版
- 3) 上笙一郎 山崎朋子 (1994) 日本の幼稚園, 筑摩書房
- 4) 貝出寿美子 (1969-06) 野口由香の生涯, 東京女子大学附属比較文化研究所紀要 p 91 私立二葉幼稚園設立主意書
- 5) 貝出寿美子 (1970-03) 野口由香の生涯(続), 東京女子大学附属比較文化研究所紀要
- 6) 手帖姫路文学館 第116号
- 7) 今に生きる保育者論 第8章日本の保育者の歩み, みらい